

A47/20

地元新聞記事を活用した戦後日本史の学習

— 高大一貫教育の中で考える —

高野 昭雄 (京都女子中学校・高等学校)

時間的制約の多い中等教育の現場で、戦後史をしっかりと学ぶことは難しい。しかし、現代の様々な出来事を理解する上で、少し前の歴史を学ぶことは不可欠であり、大学で様々な学問にふれる際の基礎ともなる。系列大学を持つ私立高校でこそ、受験勉強にとらわれず深く学びたい。

中等教育で戦後史を学ぶ際には何といても写真資料が重要となる。『歴史地理教育』2010年7月増刊号には、「現代史の学習22テーマ—授業と資料—」として数々の実践が紹介されているが、論者の多くが写真資料を有効に使っている。

写真資料に次いで、時代の雰囲気伝える資料として、新聞資料がある。まだテレビの普及していなかった当時、新聞はオピニオンリーダーとして大きな影響力をもっていた。本研究では、この新聞記事、とりわけ地元京都の新聞である京都新聞の記事を中心に、敗戦から約15年間のいわゆる「政治の時代」における記事のうちから、生徒が興味を持ちやすく、かつ基本事項の理解に役立つ資料を集めてみた。本稿で取り上げる新聞記事が「当時の雰囲気」をつかむ一助になればと思う⁽¹⁾。

【記事①】「縁日以上の雑沓 跡を絶たぬ闇市場の実情」『京都新聞』1945年10月28日

〔京都駅ステーションホテル裏の闇市場〕夜明けとともに大きい風呂敷包を持ち、箱を口いだ男や女が口を接して集まり、六時すぎから闇市場が開かれる、どこからどうして集められたのか食料品をはじめ衣料、家庭用品などを風呂敷や紙包みから出して売り始め、これを群衆が一かたまりつつ掴んで公然と闇値の取引が行はれてゆく、この闇市場のラッシュアワーは午前六時から九時までで、早朝は市電伏見線東の七条須原通りから漸次軌道を西へホテル裏へ移動して店が開かれ昼すぎにはちらほらしか売られてゐない、ここで売つてゐる九割までが食料品で、まづ三箇五円のむし芋から始まつて若い女が「おなじみの甘いおはぎ」と売声かけてゐる一箇六円のおはぎ、そして四箇十円のむしパン、つくたての餅が一箇五円と柿が三箇で七円、白い握り飯が三つで十円、飴饅頭が同じく三箇十円、みかん一山五箇が十円、松茸百匁が十五円、肉百匁廿八円、芋パンが一箇四円、変り種ではいなごの醤油だきが一串廿匹で一元と凡ゆる食物が売られてゐる……

【記事①】は京都の闇市に関する記事である⁽²⁾。東海道、北陸、山陰などの各本線が集まる京都駅は、ヤミ物資の集散地であった。「いも千五百貫 京都駅の取押え」『京都新聞』1947年2月8日、「ヤミ列車、抜打ち 京都駅で白米22石押う」『京都新聞』1947年3月27日などの記事も生徒に紹介したい。東山トンネルを抜けて京都駅へ向かう列車がスピードを落とす鴨川河川敷で、列車からヤミ物資を投げ落としたという話は現地で語られる。多くの日本人がヤミ米なしでは生きることができず、京都市に住んでいた筆者の父も滋賀方面や京田辺方面へ買い出しに行った話をする。

【記事②】「感情の縫れから 七条署の大乱闘事件」『京都新聞』1946年1月28日

……事件の起りは昨年十二月下旬から京都駅構内に掲げてあつた「中華民国京都華僑連合会出張所」「朝鮮連盟京都本部出張所」口連記した看板が十八日夜、何者かによつて取はづされた、之を七条署員の行為であるとその責任を問ふと共に、廿日同署内で生じた一巡查部長と口華僑青年警備隊長のトラブルを明らかにするため、廿四日午後一時華僑連合会および朝鮮連盟代表十五名が小寺署長を訪問したが「看板は署員の知らぬ事である」との回答から感情問題となり、代表の林某が手錠(かねて川

端署から中華民国華僑青年警備隊に貸与されてきたもの) を取出したのがきっかけとなつて、署長の非常ベルで駆けつけた署員との間に小競合ひが生じ、これに応援のため附近の親分ら百余名がとつて替り棍棒、鳶口などをふるつて乱闘となり、双方負傷者を出し一旦引揚げたが、四時すぎ急を聞き集つた華僑、朝鮮人らと白鉢巻で待つてきた親分らとの間に再び大乱闘が演ぜられ遂に死傷者を出す不祥事件となつたものである……

【記事②】は、ヤミ米買い出しの朝鮮人と闇市を支配するヤクザとが衝突した七条署事件を記す。敗戦国である日本の法律に従ふ必要はないとの考えから、日本に住む多くの朝鮮人、中国人が買い出しに従事した。七条署(警察)と朝鮮人の関係が悪化する中、七条署に押しかけた朝鮮人と警察応援のため七条署周辺に集結していたヤクザとが乱闘になり、死傷者が出る。七条署事件は、当時「第三人⁽³⁾」と差別的に呼ばれた朝鮮人・中国人の行動に手を焼いた警察が暴力団とむすんで治安維持をはかった事件であり、浜松など他都市でも同種の抗争事件が起こった。

【記事③】「知事市長ら監禁 全く暴徒行為 〈神戸の朝鮮人事件〉」『京都新聞』1948年4月27日
四月二十四日(土曜日)約一千名の朝鮮人がたまたま知事、市長、警察長が会議中の県庁前に集合、ついで約百五十名が建物内に侵入して電話線を切断の上右三名の日本人官吏を監禁した、これら日本人官吏に対する不法行為と襲撃により朝鮮人は知事に対し次の諸要求を承認せしめた△不法行為に対する裁判のため目下拘禁中の朝鮮人の釈放△釈放された法律違反者を起訴しないことに同意すること△朝鮮人学校に関する裁判所の命令を取消すこと

【記事③】は阪神教育闘争を示す。占領当初、朝鮮語での授業や朝鮮語教育を行う朝鮮人民族学校は容認されていた。だが、冷戦が深まる中で、SCAP は左翼勢力の影響下にある朝鮮人学校の力を削ぐ方針をもつにいたり、日本の学校教育法に従わない多くの朝鮮人学校に閉鎖命令が出されるにいたつた。こういった命令に反発する闘争が、阪神教育闘争である。日本に住む朝鮮人の法的地位はあいまいで、選挙権の行使では外国人扱い、教育問題では日本人扱いが押しつけられた⁽⁴⁾。

【記事④】「警官負傷百五十人 京都のデモ隊荒れ狂う」『京都新聞』1952年5月2日
京都におけるメーデーはデモ行進に移るや漸次不穏な情勢をみせ、派出所、市役所などのガラス窓を破壊、祇園石段下、円山などにおいて極度の混乱を現出して遂に催涙ガスの使用をみた。このため警察官百五十余人が重軽傷を負い、一般市民、デモ隊員にも負傷者を出した。

【記事④】は京都のメーデー事件に関するものである。東京のメーデー事件(皇居前広場事件)は教科書に掲載されているが、生徒は遠い東京の事件として語句を暗記するにとどまってしまう。地元京都の普段自分達が歩いている所で同様の事件があったことを紹介し、時代の雰囲気をつかむべく想像力を働かせたい。

【記事⑤】「朝鮮人ら吹田操車場など襲う 六・二五デモ」『京都新聞』1952年6月26日夕刊
二十四日夜、米軍伊丹飛行場を眼下に見下す豊中市待兼山の阪大北校校庭で六・二五記念前夜祭のファイヤーストームを行い氣勢をあげた朝鮮人、学生ら約一千人は二十五日午前零時半ごろから下山をはじめ、主力は待兼山越しに吹田市方面へ、一部は京阪神急行宝塚線石橋駅へ向つたが、吹田市に向うとみせた主力も山をウ回し、午前二時ごろ石橋駅前に合流して約六百人となり、同駅長に臨時電車を出せと交渉、約一時間もみ抜いたあげくついに午前三時四両編成の臨時電車を出させ大阪梅田駅に引揚げるとみせて途中服部駅で下車、徒歩で千里山ろく伝いに吹田市に入り同六時十分国鉄岸辺駅に侵入して窓ガラスを破壊、地下室に火炎ビンを投げこんだのち、西方から吹田操車場を襲撃、手に手に赤旗、こん棒、竹ヤリなどで構内線路上をジグザグデモを行つた後、〔中略〕約二時間にわたつて吹田市を中心に荒れ狂い、午前八時ごろデモ隊主力数百人は国電吹田駅に集合〔、〕同駅フォームに停車中の始発電車になだれ込み窓から火炎ビン竹ヤリをフォームに投捨て同電で午前八時ごろ大阪へ向う吹田市の暴動は漸く平静となつた。

【記事⑤】は、血のメーデー事件（東京）・大須事件（名古屋）と並んで戦後三大騒擾事件の一つとされる吹田・枚方事件（大阪）について記している⁽⁵⁾。勤務校は私学ということもあり、吹田・枚方など大阪府北部から通ってきている生徒も多いが、この事件は、これまで学校教育で扱われてこなかったため殆ど知られていない。吹田事件は、地元ではなじみの深い阪急電車が深夜、石橋駅から服部駅まで臨時電車を運転させられるなど、生徒にとって興味を持ちやすい題材である。朝鮮戦争反対運動と共に、日本が、戦後武器の製造・輸出をしていたという事実を学びたい。

【記事⑥】「対立する二つの旭ヶ丘中学」『京都新聞』1954年5月12日

片や市教委の“補習授業”片や京教組の“管理授業”と真ッ二つに分裂した旭ヶ丘中学—全教育界、全市民の注視のもときのう十一日学友が離れ離れに授業を受けたが、“悲劇の学校”二つの旭ヶ丘中学の第一日の風景は——

【記事⑥】は旭丘中学事件に関するものである。一つの中学校が、バスで通う市教委の補習授業と京教組の管理授業に分裂して授業が行われたという今では想像することもできないような事件が起きる。バス停付近での生徒の奪い合いなど、写真資料も使いながら、善悪二元論で割り切るのではなく、政府の逆コース政策と教員組合との緊張関係について学びたい⁽⁶⁾。

【記事⑦】「ひどい取調べ検事 留置場に入れられた証人村松さん」『京都新聞』1956年4月10日

京都地裁の四少年被告の公判で「血のついたナイフを持った男を公衆便所で目撃した」と証言、京都地検に偽証容疑で逮捕される憂目をみた上京区蘆山寺通千本西入ル下ル村松泰子さん（二〇）は九日勤め先の長野県小県郡西塩田村新町クリーニング店小林勘亮さん（四一）方で次のように語った。…係の森島検事は三月一日の朝から二日午前二時まで私を調べ、ついに偽証罪だといって留置場に放りこまれ午前八時ごろまで入れられていました。その後次席検事（名は忘れた）の調べを受けてようやく疑いが晴れて出てきましたが、森島検事の取調べはひどいもので私がいいもしないことを「こうだろう」と勝手にメモし「お前は四人とグルになっているのだろう。長野へは逃げていつたのだろう。四人をかばうヤツは罪人だ。偽証罪になるぞ」などといった調子でした。長野県へ来ても腹の虫が収まらないので去月七日手紙を七枚書いて京都地検へ“取調べの不当”を訴えました。

【記事⑦】の述べる五番町事件は、京都の遊廓で起きた殺人に関するえん罪事件である。在日朝鮮人の少年と被差別部落の少年を含む4人の少年が見込み捜査によって逮捕され、さらには真犯人を目撃し証言した女性までもが偽証罪をでっち上げられ逮捕されてしまう。えん罪をテーマにした映画「真昼の暗黒」を見て反省した真犯人が1年後に自首することによって、事件の真相が明るみに出ることになる。えん罪事件は、現代でも足利事件や厚生労働省村木厚子氏の事件など、次々に起きており、過去の話としては割り切れない。いずれも共通する点が多く、比較しながら学びたい。

【記事⑧】「船一ぱい希望の顔 新潟港」『京都新聞』1959年12月14日夕刊

「さようなら」「チャルガシオ」初冬の冷たい潮風がほおをなでるふ頭に日本語と朝鮮語の別れのあいさつが飛びかう。新潟—清津を結ぶ帰還船の船出だ。きょうも朝からカラリとした天気だったが、昼近く北日本特有の鉛色の空に変わった。この空をつき破るように「金日成の歌」の大合唱がふ頭を包んだ。赤十字のマークもあざやかな船上に並ぶ朝鮮人の希望に満ちた顔、その顔に「第二の故郷」「生まれ故郷」である日本を去る一まつの寂しさも漂う。だが、この帰還船が日韓両国の連絡船に生まれ変わる日も遠くないだろう。

【記事⑧】は、北朝鮮帰還事業に対するマスコミの好意的報道である。2002年の日朝平壤首脳会談は、北朝鮮による日本人拉致事件の衝撃をもたらした。この衝撃の中で、1959年に始まった北朝鮮帰還事業もメディアに取り上げられるようになった。戦後史における人権問題として、是非とも学ぶべきテーマである。なぜ9万人以上もの人（しかもその多くは朝鮮半島南部生まれ又は日本生まれであった）が、北朝鮮へ渡ったのかを考える時、植民地時代から、戦後当時いたる在日朝鮮人に対する差別や偏見が、現在よ

りもはるかに強かったことを歴史的に振り返る必要がある。また近年、北朝鮮帰還事業をテーマにした研究が次々と発表されている⁽⁷⁾。これらの研究により、労働者・技術者の導入や帰国者の財産の活用を目的とした北朝鮮政府や朝鮮総連の責任、あるいは好意的報道を行った日本のマスコミの責任が問われるとともに、生活保護世帯率が高く、共産主義者が多い上に、治安を乱す外国人を、日本政府が厄介払いしようとしていたという側面も明るみになってきている。

本稿で紹介した記事は、いずれも極めて重要な出来事を扱っている。だが、紙幅の関係もあり、本稿では概略を記すにとどまった。実際には地元紙だけではなく、全国紙との比較も織り交ぜ授業を構成することになる。また今回対象とした戦後の15年間は、在日朝鮮人史100年の中で、在日朝鮮人が最も否定的に見られた15年間である。戦後60年以上が経過した現在、冷静に、在日朝鮮人史100年全体の中で振り返る必要がある。一つ一つの事件について、さらなる資料収集を行い、より豊かな教材開発を進めることが今後の課題となる。

【注】

- (1) 京都の戦後史に関する基本文献として、夕刊京都新聞社(1966)『戦後京の二十年』夕刊京都新聞社、京都市(1976)『京都の歴史9－世界の京都』学藝書林、京都府警察史編集委員会(1980)『京都府警察史 第3巻』京都府警察本部、京都部落史研究所(1991)『京都の部落史2 近現代』阿吽社などがあり、本稿でもこれらの文献を参照している。
- (2) 京都の闇市については、田中はるみ(1996)「京都の闇市」(『史泉』第83号、1～17頁)などを参照。
- (3) 第三人の用語については、水野直樹(2000)『『第三人』の起源と流布についての考察』(『在日朝鮮人史研究』第30号、5～26頁)などを参照。
- (4) 阪神教育闘争については、金賛汀(2004)『在日、激動の百年』朝日新聞社、金賛汀(2010)『韓国併合百年と「在日」』新潮社、松下佳弘「占領期における朝鮮人学校政策の展開—京都府・滋賀県の事例から」(京都大学大学院教育学研究科、2009年度修士論文)などを参照。
- (5) 吹田・枚方事件については、西村秀樹(2004)『大阪で闘った朝鮮戦争』岩波書店、脇田憲一(2004)『朝鮮戦争と吹田・枚方事件』明石書店、朴沙羅(2010)「〈事実〉をつくる—吹田事件と言説の政治」(『ソシオロジ』第167号、89～104頁)などを参照。また吹田・枚方事件に関し、近現代史研究者の塚崎昌之氏に、現地フィールドワークを通じて、数々の有益なご教示を得た。謝意を表したい。
- (6) 旭丘中学事件については、佐藤隆(1992)「1950年代前半における平和教育の展開と学校観をめぐる相克—京都・旭丘中学校の事例に即して」(東京都立大学人文学部『人文学報』第230号、39～75頁)、法政大学大原社会問題研究所『日本労働年鑑 第28集 1956年版』などを参照。
- (7) 北朝鮮帰還事業については、テッサ・モーリス・スズキ(2007)『北朝鮮へのエクソダス』朝日新聞社、菊池嘉晃(2009)『北朝鮮帰国事業』中央公論新社、川島高峰(2005)「追放政策と集団主義の狭間で」(『論座』第119号、240～248頁)、黒河星子(2009)「1950年代の在日朝鮮人政策と北朝鮮帰還事業」(『史林』第475号、525～564頁)などを参照。